

<講演要約>

講演題目：「私の体験的学校教育観－教師と言葉の重力－」

講師：田中雄三鳴門教育大学長

学長としてではなく、個人的体験に基づいた話をします。

子どもは、教師の言動を意外によく覚えているものである。それは長い時間をかけて子どもを呪縛する。記憶錯誤もあるかも知れないが、それはそれで意味がある。何しろ教師から受け取った言動、メッセージは、たとえ記憶錯誤であったとしても本人に影響を与え続けるわけだから、それなりに意味があるであろう。げに教師という職業は恐るべしである。どのような教師に出会うかは運命である。子どもは教師を選べない。不条理と言え不条理であるが、ア・プリオリに存在する言語という象徴体系の中で自己実現を図っていかざるを得ないのが人間存在である。

以上のような考えから、ここに自験例（私自身の小・中学校の体験）を呈示し、それを省察することによって学校教育というものについて、特に学校現場の教師の言葉の重力について考えてみたい。

私は小・中学校の頃考えていた人生とは全く違う生き方をすることになったが、担任教師の言葉は少年期の私を形作り、今もって私の精神に少なからぬ影響を及ぼしているのではないかと思う。

教師の資質として何が必要かと考える時、三つのことが頭に浮かぶ。一つは、人間好きであること。二つは、象徴体系としての言語によるコミュニケーション能力に秀でていること。三つは、授業展開力である。自験例に登場する教師は、いずれも三つの要素を備えていると思う。人間形成期において、このような教師に出会い、教えを受けたことはラッキーというほかはない。通知表の「行動の記録」から、私という人間を理解し、言語化し、明確に把握していることがわかる。現在の学校教育の質的レベルと遜色がない。子どもに自信を持たせる言語の重要性を認識し、そのように言語の機能を使っている教師、子どものファンタジーを満たす話し上手な教師、規律の重要性を徹底して教える教師、兄貴的・叔父的心理的距離の中で未だ見ぬ遠くの競争相手を意識させ自信を育てようとする教師、自尊心を育み野心を持たせようとする教師、競争の中で平穏な気持ちを抱かせる教師、現実の直視と上昇志向的人生を明示する教師。私という人間は、教育という仕掛けの中で言語を媒介にして、彼らの言語で構成されている。今日の話にはノイエスは何もない。ただ、私は教師の発する言葉の重力について、一度は言説として強調したかったのである。

（なお、事例を示しての講演であったが、事例についてはネット上での掲載を控えます。季刊「栄養教諭」※ 第 35 号,pp6-pp13,2014 をご覧下さい。※一般の書店での販売はしておらず、年間購読をしている栄養教諭さん、栄養士さんにお尋ねになると教えてくださると思います。）

（文責：仙台の佐藤）